



## 2016年度男女共同参画事業シンポジウム「カウントされない生／命」 概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅井, 美智子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/15405">http://hdl.handle.net/10466/15405</a>

## シンポジウム「カウントされない生／命」

2016年7月16日（土曜日）

大阪府立大学中百舌鳥キャンパス

### 【概要】

今日、生命の尊さに異議を唱える人々がないという共通認識がありながら、多くの生命は個性ではなく「数」として把握されています。たとえば、平均寿命やガンの発症率など、数え上げたらきりがなくらいです。しかし、他方でこの数字にすらカウントされない「命」や「生」が存在しています。その目にみえない命や生のほとんどは、生命を生み出す生殖医療の中から生み出され、実験や医薬品の医療資源として流通しています。また、近年、女性と子どもの貧困が指摘されるようになりましたが、世界規模で女性と子どもの「使い捨て」が進行しています。使い捨てられた女性や子どもの生はカウントされないのです。このような状況を現代の新しい奴隷制と呼ぶ社会学者もいるくらいです。

さて、本シンポジウムでは、二つの視点から「カウントされない生／命」を見ていきます。ひとつは生殖医療のなかで廃棄される命について、もうひとつはみえない／みえにくい母子の貧困により捨て置かれる生についてです。前者は子どもを産みたいと願う女性の身体を使った、あたかも壮大な実験場であるとさえ見えます。後者は孤立した母親とともにその子どもが社会から捨て置かれているということでしょうか。

女性は妊娠・出産する身体をもつがゆえに、子産みや子育てをあたかも「自然」に行うものとみなされてきました。しかし、不妊治療の現場から消えていく生命や、孤立した母親の手からこぼれた子どもの生や命について、その責任を母親だけの問題にするべきでないことは明らかでしょう。これらのカウントされない生／命は、グローバル経済の進展のなかで、

日々モノのように扱われています。

本シンポジウムでは、「みえない」、あるいは「カウントされない」生や命について、以下の四つの視点から報告がなされました。報告タイトルと報告者は次の通りです。以下の報告内容については代表して浅井がまとめました。

- [1] 「望んだ妊娠から消される子ども——中期中絶から死産児へ」  
山本由美子（大阪府立大学講師）
- [2] 「不妊治療の現場から消えていく受精卵」  
居永正宏（大阪府立大学客員研究員）
- [3] 「みえない母子の貧困と孤立」  
梅田直美（奈良県立大学講師）
- [4] 「売買される卵子・妊娠出産」  
浅井美智子（大阪府立大学教授）

（浅井 美智子）